「神の国が来る」　2023年09月22日

ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスはお答えになった。「神の国は、観察できるようなしかたでは来ない。『ここにある』とか、『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの中にあるからだ。」それから、イエスは弟子たちに言われた、「あなたがたが、人の子の日を一日だけでも見たいと望む時が来る。しかし、見ることはできない。『そら、あそこに』『そら、ここに』と人々は言うだろうが、出て行ってはならない。また、追いかけてもならない。」（ルカ17：20～23）

主イエスは「神の国」を現わしておられた。ファリサイ派の人々は律法遵守を誇り、貧しくて律法を守れない人々を蔑視していたので、主イエスの現わされた神の国が見えなかった。彼らは、神の国を説く主イエスに、神の国はいつ来るのかと問うた。主イエスは、「神の国は、観察できるようなしかたでは来ない。『ここにある』とか、『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの中にあるからだ」と答えられた。神の国は主イエスの働きにおいて、既に実現しているが、彼らはそれを見ようとしない。神の国は「そこに見える」というような仕方ではなく、あなたがたの中にあると言われた。「あなたがたの中」は、心の内部にという意味ではない。神の国は神を信じる個人的なことから始まるが、その信仰は他者との関りを作り出す。即ち、神の愛を知り、その愛の関係の広がりが「神の国」の実態である。主イエスはファリサイ派の人々に、神の国はあなたがたの中に到来しているが、あなたがたはそれを見ることができないだけだと言われた。それから、弟子たちに主イエスの再臨による終末について黙示文学的に語られた。弟子たちは主イエスと地上での別れをした後、再臨を待望するが、偽りの再臨情報に惑わされてはならない。人々は「ここに、あそこに」キリストが来られたと言って大騒ぎをするが、出て行ったり、追いかけたりしてはならない。偽キリストに従ってはならない。終末は稲妻が閃いて、大空の端から端へと輝くように、人の子（キリスト）も、その日に現れる。しかし、その前に、人の子イエスは、多くの苦しみを受け、今の時代から排斥される。民衆は、主イエスがエルサレムに入られると、神の国は到来する、弟子たちも終末が間近いことを期待し、待望していた。しかし、誰も主イエスの苦難と死を理解していなかった。

ノアの時代、家族が箱舟に入る日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていたが、洪水が来て、一人残らず滅ぼされた。ロトの時も、ロトがソドムから出て行った日に、火と硫黄で滅ぼされてしまった。人の子が再臨される終末時、同じようなことが起こる。その日には、屋上にいる者は家財道具を取り出そうと下に降りてはならない。畑にいる者も戻ってはならない。ロトの妻は豊かに暮らしていた生活に未練を持ち、振り向いたために塩の柱になったと、「自分の命を救おうと努める者は、それを失い、それを失う者は、命を保つのである」と警告された。寝床に二人いれば、一人は取られ、他の一人は残される。臼を引いている二人の女の内、一人は取られ、他の一人は残される。主イエスは、再臨による終末時には、このような過酷な裁きが起こると繰り返し語られた。弟子たちは恐怖心をもって「主よ、それはどこですか」と尋ねた。主イエスは「死体のある所には、禿鷲も集まるものだ」と応じられた。終末は、死体のある所に禿鷹が集まるように、あらゆる場所で生起すると、神の裁きの普遍性を語られた。主イエスは終末の裁きを黙示的に語り、この日に備えて、ノアやロトのように神の言葉に従えと諭したのである。